あんこやＯＬＣメッセージ（２１０４０９原稿）

こんばんは、今日はイースター、復活祭から五日目の金曜日ですね。
今日のお話もパウロさんシリーズから離れて、イエス様が復活なさった後の、丁度そのあたりの出来事からお話します。
このメッセージは私は大好きで、自分が書いておきながら、いつも読み返しては感動しているありさまです。（自画自賛！）

引用聖句はヨハネによる福音書２１章９節
「さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」

題は　寒かったべえ、あったまんな、飯できてっぞ
副題：見ないで信じるものは幸いである

ちょっと聞いた話では、本来のヨハネ福音書は２０章までだとも聞きました。
確かに２０章の終わりでは、それで終わったような記述になっていますね。
しがし２１章のこの情景は本当に絵のように美しいのです。

さて前にも説明したと思いますが、以前は私は福音の根幹は十字架の贖いだと思っていました。
復活を無視するわけではありませんが、その価値がピンと来ていなかったのです。
ＪＴＪ神学校に入学して、「福音とは十字架の贖いと復活なのだ」という事を何度も修正されるたびに『おっと』と思い直したりしていました。
しかし何度も何度も修正されるたびに、トンカチ頭の私でも『何故そこを強調されるんだろう？？』と思考を深める事になりました。
しかしそれは私にとって実に幸いな事だったのです。

何故なら十字架論だけだと、「罪ｖｓ贖い」という「人の理屈」になってしまいなりがちになる、理路整然と人間の理屈で割り切った話になってしまうのです。
だから一部の人が言う「罪を説明しないと贖いが、救いが判らない」という逆立ちした論になるわけです。
それに対して復活は論理無視です、奇想天外・説明不能・理解不能な世界です。
だからこそこの二つが並列して語られないと、段々奇怪しい世界になってくる、十字架論だけに注目していると、次第次第にキリスト像が歪んできて、人間の論理教になって

しまうのです。

十字架の身代わりの贖いは確かに福音の根幹、私達の罪が贖われるのには間違いありません。
しかしその事だけ注目していると、今言ったようにキリスト像が歪んできます。
その上に、その言葉だけでは心底からは納得できません、それだけだと単なる「口約束」になってしまうからです。
つまり話だけの口約束ならば、十字架の贖いによって救われるという事は「死んでみないと判らない」事になります。
それでは伝道にならない、説得力がありません。

*「信じるだけで本当に救われるの？」*
*「ええ、信じるだけで救われるんですよ、修行は必要ないんです。」*
*「それって証明できるの？」*
*「えっと・・そ、それは死んでみれば判りますよ」*

これでは全然説得力がありません、「死んでみて初めて判る」ようでは言葉に力はありません、伝える力がありません。

まさにイエス様の直弟子たちはその通りの自信を失い、力を失った状態でした。
四福音書のどれを読んでも、リーダーを失い、希望を失い、失意のどん底にある弟子たちが描かれています。
弟子たちは最後の最後まで、イエス様の事を政治的なリーダー、ローマの圧政を撥ね除けて、昔のイスラエル帝国の繁栄を取り戻してくれる人、その為に神から遣わされた人・・・と混同していたようです。
それなのに、ああそれなのに、ラビはあっけなく死んでしまった、今まで沢山奇跡を見せてくれたのに、あれは一体なんだったんだろう、人を獲る漁師にして上げようなどとイエス様の口車に乗せられて、職を捨てて家族を捨てて故郷を捨てて野宿してまで従っていた三年間は、一体なんだったんだろう、これから一体どうしたら良いんだろう・・・
四福音書のどれを読んでもそんな失望感・絶望感が伝わってきます。

そのような中で、ペテロは「おらあ国さけえって、漁さするだよ」とボソリと呟きました。
一体何をしたら良いのか判らない、とりあえず彼が思いついたのは故郷のガリラヤ湖畔

のカファルナウムに戻って、元の仕事の漁師をすることだったのです。
人は失意のどん底にあるときは、故郷の風景に慰められるものなのかもしれません。

聖書のテベリヤ湖とはガリラヤ湖の事ですが、丁度今頃は花が咲き始め、美しい景色なのに違いありません。
イエス様の育ったナザレ、そしてガリラヤ湖周辺の気候は、雨が多く緑豊かな土地なのだそうです。
乾燥した砂漠地帯のイメージがあるパレスチナですが、ガリラヤ地方は降水量も多く、緑豊かな土地のようです。
乾季と雨期とがはっきり分かれていて、乾季の夏には４０度近くまで気温が上がるので、そういう砂漠のイメージが先行しているのかもしれません。
年間降雨量が３００ミリあたりで砂漠の境目になるらしいんですが、ガリラヤ地方は年間で１２００ミリも降るんだそうです。
水源地の山のヘルモン山は海抜２８００もあるわけで、それに遮られた地中海の湿った風が雨をもたらしているわけです。
ついでに日本の平均が１７００ミリ、岐阜も１７００ミリ、１４００ミリというと、千葉・茨城・宮城あたりがそれくらいだそうです。
最小が長野の９００ミリだそうですが、エルサレムでも６００ミリちょっとありますので、ひどく乾燥した土地というイメージはあまり正しくないようです。

ちなみにガリラヤ湖は大体琵琶湖の三～四分の一程度の大きさの淡水湖で、ヘルモン山からヨルダン川が流れだして湖に注ぎ、出口はヨルダン川となって死海に注ぎます。
ガリラヤ湖には色々な魚がいるらしいんですが、ペテロ達が主に獲っていたのはティラピアの仲間だったようです。
これを塩漬けにして重要な産品としていたようです。
なかなか美味しい魚で繁殖力が強いために、タイ王国の戦後の食料難の時に前の天皇陛下が稚魚を送ったんだそうで、今ではエンペラーズ・フィッシュとか呼んで、タイ国の重要なタンパク源となっているのだそうです。

余談ですが、税金のことをとやこう言われたイエス様が、釣りをする事を命じて、魚の口の中に金貨がどうとかいう話がありますね。
あの魚は間違いなくティラピアです。
この魚は口が大きくて、幼魚を口の中に入れて保護する習性があるのですね。
沖縄にも沢山いますが、実際にそうやって赤ちゃんを口に入れるのを目撃したことがあります。
この金貨の話を読んだ途端に、そのことを思い出しましたよ。

それはともかく、この時のペテロの心中を思うと、本当に可哀相になります。
それまで神がかりだったイエス様が、あっけなく十字架で死んでしまった、天の軍勢を呼んでローマ兵や威張り腐った祭祀達をやっつけるんじゃなかったんかい？？？
失意と失望・絶望、おまけにあれほど決して離れないと誓っていたイエス様を、あれほど慕っていた主を裏切って逃げ出して、その上イエス様の預言通りに鶏が鳴く前に三回もイエス様を知らないと言い張って・・・・

その上に一晩中漁をしても何も捕れない。
本当にペテロ達の心は砂を噛むような気持ちだったでしょうね。
この「何も捕れなかった」というのは、イエス様に従った三年間の生活はなんだったんだろう、虚しいという失望の象徴のようにも思えます。

私達の中にもこういう姿を見ることがありますね。
信仰を得て洗礼を受けて意気揚々、嬉しくて仕方ない、片っ端からイエス様のことを伝えて歩く、でもなかなか成果は上がらない、その内に失敗もあるでしょう、私のように失意の事件も受けるかもしれない、毎日過ごしていても特別変わったこともない、段々と教会生活もマンネリになってきて、同じことの繰り返し。
キリストに似た者となろうと励まされても、なかなかそんな事できるこっちゃない。
その内に弾んだ心は次第に萎み、背は丸くなり、顔は下を向いて暗くなってきて、いつしか教会にも来なくなる・・・そんな姿は沢山見ていますね。
しかしそんな時にこそ、私達が失意にあって背を丸くして下を向いている、そんな時にこそ、キリストは私達を見捨てず側に居てくださるのです。

とうとうガリラヤ湖は白々明けになってきました、そしてふと岸を見たらイエス様が立っておられたのです。
皆様はこの暗い顔をしたペテロ達と、それを見守るキリストの眼差しとの対比をどう思われるでしょうか。
ここでの「既に」という言葉は「既に夜が明けて」とも「既にイエスが岸に立って」とも訳せるんだそうです。
私は後者の方がずっとこの情景にあっているような気がします。
私達の主は強固な強い信仰の者に臨在してくださるのではない、そうではなくこのように弱い信仰、すぐに負けてしまう弱い心にこそ寄り添ってくださるのです。

主である事が判ったペテロはどのように心が踊ったでしょう。
水に飛び込んだと書いてありますが、２００ペキスとは大体９０メートルくらいだそうです。
確かに１００メートル近く離れれば、朝もやの中ではちょっと誰だか判らなかったでしょうね。
泳ぎ着いた彼は主の足元にひれ伏してすすり泣いたのでしょうか、それとも足を抱いて号泣したのでしょうか。
勝手な想像ですが、緑豊かな朝もやの湖の岸辺で、ずぶ濡れのペテロは足元に正座して言葉も無しに呆然とただ主を見上げ、主はあたたかい慈愛の目でじっと彼を見下ろしている・・・そんな光景を思い浮かべてしまいます。

なんとイエス様はもう炭火をおこして魚を焼いてパンも用意してくださっていたのです。
帰って来た弟子たちは主と共に朝もやの中で朝食を摂りました、弟子たちはどんなに幸せな時を過ごしたことでしょう。

こうやって主イエス・キリストは私達に生命の糧を与えてくださるのです。
身も心も疲れ果てた私達に、主自ら朝もやの中で、炭火をおこして、魚を焼いて、パンを用意してくださるのです。

この聖書の食事の描写は、私達が疲れ果てて失いかけた信仰の力を取り戻すためのプロセスを象徴しています。
私達には失いかけた信仰を燃え立たせることは、自分自身の力ではできない、私達には自前の生命の糧は持ち合わせていない、それは復活の主が私達のために用意してくださるのです。
主自らこうして私達を慰め、励まして下さるのです。

私自身、この９節以降の「陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。」という淡々とした記述をなんとも思わず読んでいましたが、その意味を今回初めて想像することができて、言葉では現せないほどの感動を得ました。
まさに語ることは学ぶことです。

確かに十字架の贖いによって私達は救われました。
それは間違いないのだけれども、それだけでは「この世では」単なる「口約束」に終わ

ってしまいます。それだけでは説得力がありません。
先程も言いましたが「死んでみないと判らない」という論理になってしまうからです。

神の御子、主イエス・キリストは人の先駆けとして、死者の中から蘇って復活した姿を見せてくださったのです。
神が人としてこの世に生まれ、神が人として育って、神が人として過ごして、神が人として死んで、そして神が人として肉体をもって蘇って復活してくださった・・・この人間の論理では到底説明できない事実を目の当たりにする事によって、私達は納得し勇気づけられるのです。
そしてこのイエス様の姿は、私たちがパラダイスを経て新天新地に、肉体をもって移される姿を予告しているのです。
その意味においてこそ、福音は復活によって初めて完成するのです。

だからこそ、失望のどん底にあった弟子たちは、これを目の当たりにする事により勇気と希望を取り戻し、今度こそ迷わず伝道に突き進むことができたのです。

私達は「見ないで信じるものは幸いである」というイエス様の祝福の時代に生きています。
単なる「約束のお話」「口約束」を信じているのではないのです。
実際に復活を見た人の証言を信じているのです。
私達が「見ないで信じている」のは「私は復活の主にお会いした、聞いた、見た、そして触れた」という力強い復活を見た人の証言からなのです。

これを私達に贈って下さった主イエス・キリストの素晴らしい慈愛に感謝し、この心踊るイースターの意義を噛みしめ喜びましょう。

この幸いを一人でも多くの人に告げ知らせましょう。

時が良くても悪くても。